

〔一〕

問1	1	2	3	4
	はやし	舞台	そうごん	徹底
	5	6	7	
	妥協	達成	浸透	
問2	ア			
問3	ウ			
問4	オ			
問5	相対			
問6	これを知っ			
問7	イ			
問8	<p>課題文の著者は、日本文化に固有の「間」を理解するヒントとして、能の音楽における「コイアイ」の間の感覚を挙げている。能の演者は人によって異なる「コイアイ」の間を持っているので、お互いに相手の間を計り合いながらも、相手の間に合わせるのではなく自分の間で打楽器を打ち合う。それによって、能の囃子は緊張感を持ち、刺激的、立体的なものになると著者は述べている。</p> <p>私は、日本文化に固有の「間」について、日本の伝統的な武道を具体例に挙げて考えてみたい。私は、数年にわたって空手を習っているのだが、空手の対人稽古や組手には、著者の言う「コイアイ」の間の感覚に似たところがある。たとえば、空手の練習生には各自固有の「間」があり、組手のときには、お互いに相手の間を計り合いながらも、相手の間に合わせるのではなく自分の間で突きや蹴りを出し合う。相手の間に合わせてしまうと、相手の攻撃を一方的に受けてしまうことになり、かといって相手の間を無視していると、技も熟練もない子どものケンカようになってしまう。やはり、お互いに相手の間を計り合いながらも自分の間で打つ、という日本文化に特有の「間」のもつ緊張感がある。</p> <p>著者は、この緊張感をもった「コイアイ」の間の感覚が、能に止まらず日本文化のさまざまな部分に浸透し、さらには日本人独自の生活規範になったと述べている。しかし、著者は、現代の日本人が「個の持つ『間』のぶつかり合いを恐れて、自分の『間』をあいまいにしてしまう」ことを批判し、「日本人が個を確立してゆく」ためには、「コイアイ」の間の原点に立ち返って「ギリギリの間の関係を取り戻す必要がある」とも述べている。これは、異文化共生が課題となった現代では重要な指摘だ。異文化に属する人々との間でも、相手の間を計りながらも個別的絶対的な自分の間を失わないような緊張感が必要になってくると私も思う。(781字)</p>			

〔二〕

問1	A	本の妻	B	今の妻	問2	エ
問3	種類	尊敬	対象	本の妻	問4	掛詞 もしくは 懸詞
問5	聞け		問6	イ	問7	ウ
問8	ア					